

日本 — 私の第二の故郷

ドゥオラ・スミタ（物理学専攻 博士課程3年 インド）

私は日本に来てもう三年になります。この間東京大学大学院理学系研究科博士課程でプラズマ物理の研究を続けてきました。私の先生は遠山先生です。遠山研究室はとても家族的でいっしょに旅行に行ったり、研究室で料理を作ったり、みんなで手伝いあったりします。遠山先生は学生たちひとりひとりのことをよく分かっていてくれます。もちろん私のこともよく分かっていてくれて、困った時相談に行くとどんなに忙しくても話し合ってくれます。だから先生のことをまるで自分の親みたいにしていました。

私はインドで実験したことがなかったで日本に来て初めて実験をしました。私の大学と東京大学の勉強の方法には違いがあったので、はじめは東京大学の雰囲気に慣れるために大変でした。私はコンピュータの使い方も知らなかったし、いろいろなことに問題がありました。だから日本に来てから私の本当の勉強が始まったという気がします。分からない時先生は親切に教えてくれました。今もいろいろ私のことを考えてくれます。

研究室の学生たちにもいろいろ教えてもらっています。例えば読めない書類が送られてきたときは、研究室に持って行けばだれかが教えてくれます。来年は遠山先生が定年で退職されます。それで今年から新しく高瀬先生と助手の江尻さんが入りました。お二人とも遠山先生と同じように私のことを面倒見て下さいますので、私はほっとしました。これで無事に研究を続けることが出来ます。

私は日本に来てたくさん友達が出来ました。今までで一番良い思い出は、友達と一緒に彼女のおばあさんの家に遊びに行ったことです。それまでは東京とか京都とか大きい町ばかり見ていたので、魚津に行って初めて日本の田舎を見ました。おばあさんが作った料理を食べて、山があって海があって景色もよくて、心からのんびりしました。

今までで一番強く感じたことは、日本人がとても親切だということです。アパートがなかなか見つからなくて困っていた時、友達のお母さんが私を一ヶ月も泊めてくれました。そしてそのお母さんは私のために近くにアパートを探してくれました。近くのほうがさびしくないし、なにかあったときにすぐ来られるからという理由でした。今は引っ越しましたが今でもお母さんは私の面倒をよく見てくれます。

日本に来て一番大変な問題はことばがわからないことでした。インドにはいろいろなことばがありますが、どこにいても英語を話せばだいじょうぶだったので、世界のどこにいても英語がわかれば生活できると思っていました。でも日本に来て日本人は日本語以外の別のことばを話さないでとてもびっくりしました。自分のことばだけでこんなになりっぱな生活ができるのは、すばらしいことだと思います。

しかし、もし日本の大学が日本にくる留学生を増やそうとするのだったら、もっとオープンで留学生を元気づけるような雰囲気を作らなければならないと思います。

学生のためのほとんどの情報が日本語で書いてあるので、留学生はその情報を全部理解することが難しいのです。たとえば授業の受け方や単位の取り方などのように留学生にも必要な基本的な情報は、英語と日本語両方で書いてあるべきだと思います。これは私のように漢字だらけの日本語がよく読めない留学生にとってとても必要なことです。今でも私は何か書類をもらったときは読めなくてドキドキしてしまいます。そして日本人のところに飛んでいって助けてもらわなければなりません。みんないつでも親切に教えてくれますが、忙しいのに申し訳ないと思います。

このように外国に暮らしていても自分の国にいたいいろいろな人と深い関係を持てたことは、ほんとうに嬉しくて驚きでした。こうして私が日本で研究できたのも文部省の奨学金があったからで、ありがたかったです。そして遠山先生はじめ理学部の先生方がいつも励ましてくれたおかげです。それから国際交流室の皆さんにもいろいろ教えてもらったり、助けてもらったりしました。

日本は私の外国への初めてのひとり旅でした。はじめはひとりで外国に行くことが少し心配でしたが、それよりも嬉しくて興奮しました。日本に来る前は、日本に行ったらたくさん働かなければならないだろうとか、ひとりで寂しいだろうとか考えていました。でも日本に来てみたらみんなが仲良くしてくれましたし、友達が来て、親切にしてくれるのでびっくりしました。日本は私の第二の故郷です。これから世界のどこにいても日本と私の深い関係はずっと続くと思います。

